

## ☆訪問看護、母子も支援 横浜市助産師会がステーション 医療的ケア児増、高まる需要

神奈川新聞ニュース 2018/08/05

<http://www.kanaloco.jp/article/351305>

＞ 横浜市助産師会（同市港北区）が中心になって開設した訪問看護ステーションの運営が、7月から始まった。全ての年代を利用の対象にしているが、特に強みを発揮するのは母子対応。助産師の専門知識を生かし、早産で生まれたり、医療的ケアが必要だったりする子どもと家族に寄り添い、住み慣れた地域で暮らすための支援を手掛ける。

7月開設したのは「はなみずき訪問看護ステーション」（港北区）と「母子訪問ステーション山本」（金沢区）も加わり、計3カ所になる。助産師会主導の開設は今回の横浜が全国初という。

母子支援に強い訪問看護ステーション開設の背景には、早産や先天性疾患などで生まれる子どもが増え、新生児集中治療室（NICU）の需要が高まっていることがある。並行して、自宅で暮らしながら医療的ケアなどを必要とする子どもも増加。同会会長の市川恵子さん（56）は「比較的早く家庭に帰るケースもあり、子どもの訪問看護の需要は増えるだろう。母子支援を得意とする助産師が関わることで、より良いケアが提供できる」と目的を話す。

助産師は全員が看護師でもある。訪問看護は高齢者向けのイメージが強いが、医師による「訪問看護指示書」の交付により、医療保険でも必要なサービスを受けることができる。「山本」の伊藤充代さん（52）は「家族と一緒に暮らした方がいい。自宅では看護できないと思っている人もいるが、その不安をサポートするのが私たちの役割」。「はなみずき」の前田いずみさん（53）は「子どものケアに加え、お母さんの胸の内を聞くなど助産師だからできることをしたい。子どもを地域で育てていければ」と考えている。

今後の活動の広がりも視野に入れる。以前、個人的に同様の試みを行った宮下美代子さん（64）は「助産師会を中心に増えてほしい。充実した体制になり、横浜発信で全国でも展開されるようになれば」と期待する。

問い合わせは、同会電話045（374）5376。

…などと伝えています。

## ☆県立高に看護師配置 難病15歳の学校生活全介助

中日新聞 北陸発 2018年8月4日

<http://www.chunichi.co.jp/hokuriku/article/news/CK2018080402100006.html>

＞ 教委派遣 北陸初、二水高で

全身の筋力が低下する国指定難病「脊髄性筋萎縮症（2型）」で、身の回りの介助と人工呼吸器が要る金沢市の村上紗楓（さやか）さん（15）。石川県立金沢二水高校に今春入学し、県教委が派遣した看護師のサポートを受けている。看護師配置は障害者差別解消法で義務づけられた「合理的配慮」の一環で、法整備が進学を後押しした格好。県立高校への看護師配置は北陸三県で初めてで、全国でも先進的な取り組みだ。

金沢二水高は県内有数の進学校。村上さんは授業や休み時間など学校での一日を、ほぼベッドに寝た状態で過ごす。授業中は書見台に教科書を立て、板書が速い場合はタブレット端末で撮影して

ノート代わりにする。グループ討論にはベッドの向きを変えて参加。所属する写真部ではスマートフォンで撮影を楽しむ。

看護師が登校から下校まで付き添い、学校生活を支える。体力を保つために二～三時間装着する人工呼吸器の管理、手押しバギーによる校内の移動、着替えの介助。教科書をめくり、消しゴムで消すといった支援も。村上さんは「勉強は大変。だけど友達とのお弁当やおしゃべりの時間が楽しい」とほほ笑む。

一歳で病気が分かり、医師から「起立、歩行は生涯、不可能」と言われた。母の悦子さん（47）は落ち込んだが、理屈抜きにかわいい笑顔に励まされ「顔を上げて生きていこう」と決意。幼稚園は健常児と一緒に過ごした。地域の小学校への就学を希望したが、市教委から「特別支援学校が適当」と通知された。悦子さんら家族は「みんなの中で一緒に過ごしてほしい」という思いを伝え、地域の小学校への入学がなかった。

通常学級で過ごした六年間、授業中は張り切って手を挙げ、休み時間は電動車いすで遊んだ。一泊合宿にも参加した。マラソン大会では男子が代わる代わる電動車いすを押し、ゴールを応援してくれた。成長するにつれ、座った姿勢を保つのが難しくなり、徐々にベッドで授業を受けることが増えてきたが、中学校も通常学級で過ごした。

高校進学は自然の流れだったが、受験や入学後の体制は不安だった。結果的にほぼ要望が認められ「みんなと同じスタートラインに立てた。ありがたいなと思う」と村上さん。「たくさんの出会いがあったから、今の自分がある。これからもいろんな人と関わっていきたい」と話し、県外の大学に進学を目指している。

法で義務づけの合理的配慮 識者「後に続く人に励み」

石川県教委によると、県立高校に看護師を配置したのは、主に「医療的ケア」にあたる人工呼吸器の管理に対応するため。特別支援学校に配置した看護師を月一金曜に交代で一人ずつ派遣している。

二〇一六年四月施行の障害者差別解消法は公的機関に対し、個人の特性に応じて必要な「合理的配慮」を行うよう義務づけた。村上さんの場合、入試でも看護師配置やベッドの持ち込みが認められた。

医療技術の進歩で医療的ケアが必要な子どもは増え、小中学校で看護師を配置して受け入れ態勢を整える動きは全国的に広がりつつある。一方、本紙の調べでは、中部九県で県立高校に配置実績があるのは石川県の他は滋賀のみだ。

先駆的に取り組む大阪府では本年度、全介助を含む四人が看護師配置を受けて府立高校に通う。今後、普通高校への進学を目指す生徒は増えるとみられる。

村上さんのケースについて、金沢大の河合隆平准教授（障害児教育学）は「高校では実績が少なく、全国的にも貴重な成果だ。後に続く人に励みになる」と評価している。

…などと伝えていきます。

## ☆医療的ケア児預かります

大崎の障害児療育施設、看護師2人確保し見守り「安全安心に配慮し対応したい」

河北新報 2018年08月02日

[https://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201808/20180802\\_13031.html](https://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201808/20180802_13031.html)

> 宮城県大崎地方1市4町でつくる大崎地域広域行政事務組合が運営する大崎市三本木の障害児療育施設「ほなみ園」（定員30人）が本年度、たんの吸引といった日常的な医療的ケアが必要な子ども（医療的ケア児）を受け入れている。5月に受け入れを開始。現在は医療的ケア児2人が週1、2回通う。登園日には、同園が新たに確保した看護師2人が対応する。

5月から週1回通う渡辺美月（みつき）ちゃん（4）＝同市古川＝は軽度の知的障害があり、自ら排尿することができない。カテーテルを使ってぼうこうから尿を出す導尿が2時間おきに必要で、登園直後と昼食前、帰る前の3回、看護師が導尿する。療育時間はもとより、食事や遊びの時間も看護師と職員が常に見守る。

市民グループが昨年、家族の負担軽減などを目的に、保育所をはじめとする公的施設で医療的ケア児を受け入れるよう市に要望したことがきっかけとなり、同園での受け入れが実現した。市が国の補助事業を導入し、同園に委託した。

大崎市内では医療的ケア児を受け入れている民間保育園もあるが、障害児、健常児共に受け入れ先が十分でない状況だ。同園でも、人員の都合で医療的ケア児の送迎を家族に行ってもらうなど課題も残る。同園は「手探りの状態だが、看護スタッフが加わったことで、健康管理など園全体でプラスの面もある。安全安心に十分配慮し、対応していきたい」と話す。

…などと伝えています。

## ☆医療的ケア児を考える 共生へ保護者のケアも

視点オピニオン | 上毛新聞ニュース 2018/08/01

<https://www.jomo-news.co.jp/feature/shiten/69706>

> 「医療的ケア児」とは、常時、医療的なケアが必要な子どもたちのことです。たんの吸引、胃ろうによる栄養の注入、人工呼吸器の装着など日常的に医療が必要な子どもたちのことを呼んでいます。

医療的ケアを必要とする子どもは2015年現在、全国で約1万7000人で、増加傾向にあります。特別支援学校や通常の小中学校における医療的ケアが必要な児童生徒数も増加しています。このような、障害の重い子どもたちが地域で安心して教育を受けられ、生活していく共生社会が求められています。

医療的ケア児は、医療技術の向上等を背景として新たに生まれた子どもたちです。それまでも、医療的ケアが必要な子どもたちは存在していました。今まで、医療的ケアが必要な障害児は「重症心身障害児」と呼ばれていました。寝たきりの状態を含め重度の身体障害と重度の知的障害を併せもつ子どもたちでした。

近年、知的な遅れがなく、自分で歩くこともできるが、人工呼吸器を装着しているなどの子どもたちの存在が認識されるようになってきました。「医療的ケア児」という広い概念が必要になってきたといえます。人工呼吸器を着けて、走り回る子どもの存在は、新たな配慮されたケアの必要性を

顕在化させました。

17年の児童福祉法の改正により、地方公共団体は、日常生活を営むために医療を要する状態にある障害児が、その心身の状況に応じた適切な保健、医療、福祉その他の各関連分野の支援を受けられるよう、体制の整備に関し、必要な措置を講ずるよう努めなければならないとされました。これにより、医療的ケア児も福祉サービスの対象となりました。

医療的ケア児が生まれ退院すると、親御さん（特にお母さん）が24時間子どもにつきっきりにならざるを得ません。そのため、お母さんが仕事を辞めるということもあります。夜間も断続的にしか眠れないなど親御さんへの負担は相当大きなものがあります。保育所や児童発達支援センターなどでの医療的ケア児受け入れも始まったばかりです。まだまだ、家に閉じこもりがちになる状況です。

特別支援学校を中心に学校での医療的ケア児の受け入れも始まっていますが、全国的には家族の付き添いを必要とする例が多いといわれています。学校に看護師さんを配置し、先生たちが医療的ケアの知識や技術を学んで対応する学校も増えてきました。

今年4月からの障害分野の報酬改定においては、医療的ケア児を支援する児童発達支援事業所などに看護師を配置しやすくするなどの措置がとられました。重い障害の子どもたちが地域で安心して生活していくためには、訪問看護を含め、多くの看護師さんに仕事をしていただける環境をつくることは、とても重要なことです。

上智大総合人間科学部社会福祉学科教授 大塚晃 高崎市八千代町

【略歴】重度知的障害者施設指導員、厚生労働省専門官を経て現職（障害者福祉論担当）。

主な研究テーマは発達障害者などの地域生活のためのシステムづくり。高崎市出身。  
…などと伝えています。

## ☆障害者に生涯学習の場 静岡県就労研究会が出張講座

静岡新聞 2018/8/1

<http://www.at-s.com/news/article/health/shizuoka/522437.html>

＞ 教員や学識者でつくる県障害者就労研究会（村松智恵子代表）は29日、重い障害のある人が対象の生涯学習講座「訪問カレッジ」を静岡市葵区の重症心身障害児者施設「つばさ静岡」で開いた。外出が難しい人にも生涯学習の場を持ってもらおうと、初めての“出張講座”を企画した。

ボランティアや会員が施設を訪れ、アロママッサージやコーヒーの試飲、音楽鑑賞のコーナーを設け、施設利用者や保護者ら約70人が香りや音を楽しんだ。藤枝市の女性（67）はマッサージを受ける三男（33）を見詰め「とてもリラックスしている」と目を細めた。

同研究会は21年前、障害者の就労支援を目的に発足した。就労継続には余暇や学卒後の学びが不可欠だが、障害者にはそうした機会が少ないとして、2005年度に静岡大で公開の生涯学習講座を始めた。その後、講座の場を日大や浜松学院大にも広げている。

各大学に出向くのが難しい人を対象に企画したのが「訪問カレッジ」だ。同施設の山倉慎二施設長は、重い障害のある人が外出先探しに苦労している事例を説明し、「訪問カレッジは普段とは違う体験ができる貴重な機会になった」と話した。

障害者の生涯学習機会拡充の機運は全国で高まっている。同研究会の瀬戸脇正勝事務局長は「運営はボランティアで続けている。支援の輪を一層広げたい」と話している。…などと伝えています。

## ☆医療ケア児の通学支援を 支える会が長崎市に要望

長崎新聞 2018.7.31

<https://www.47news.jp/2615343.html>

> たんの吸引など医療的なケアが必要な子ども（医療的ケア児）の保護者や支援者でつくる「県障害児・者と家族の生活を支える会」は30日、特別支援学校のスクールバスに看護師を同乗させるなどして、医療的ケア児もバスを利用できるようにするなどの通学支援を長崎市に要望した。

同会によると、スクールバスは医療行為をできる人が同乗しておらず緊急の際に対応できないため、乗車中にケアが必要な子どもは利用できない。このため保護者が車で送迎しているが、保護者が体調不良の時などは子どもは欠席せざるを得ない。一方で看護師を確保してバスに同乗させている自治体もあるという。

仰木真樹会長ら7人が長崎市役所を訪問。スクールバスのほか、▽通学時のマイカーへの訪問看護師などの同乗▽保護者が病気の時などの福祉タクシーの利用、も田上富久市長に要望した。仰木会長は「子どもは登校することで成長し、学校が楽しいと言っている。笑顔を増やしてあげたい」と述べた。市長は「まずは実情を把握することから始めたい」と応じた。

…などと伝えています。